JOCV千葉OB会報

2019年1月 No. 95

新年号

1. 年頭所感 "協力隊よ、どこへ行く"第3弾(最終回)

謹賀新年、「平成」最後の年が明けました。

年頭から明るくない話で恐縮ですが、とうとう協力隊事業は 終わりに向けて動き始めたようです。

先般、2017 年秋の行政事業レビューを受けて青年海外協力隊 事務局が進めて来た事業改革が発表されましたが、抜本的に、 かつ画期的な改革と考えていた「ボランティア事業の統合」の チャンスを逃す結果になってしまいました。

結論的には、有識者と称する委員から指摘された事項や内容をそのまま受け入れ、人件費補填の廃止、海外手当ての一本化、ボランティア区分や名称の変更など言われた通りに改革した感があります。

協力隊事務局は言います。「事業改革によって分かり易い事業にしました。」と。次に、「従来の要請を一般案件とシニア案件に分けました。」と説明します。名称については「青年海外協力隊」はそのままに、シニア海外ボランティアを「海外協力隊」に、日系は「日系社会青年海外協力隊」と「日系社会海外協力隊」になりました。要するに、何かと誤解のある「ボランティア」と言う呼称を廃止して、根っこは「海外協力隊」に統一しましたと言うことです。これにシニア海外協力隊と日系社会シニア海外協力隊を加えた合計6つの事業の誕生です。

処遇については、一般案件は 4 つの事業共に基本的に同じとし、シニア海外ボランティアの家族随伴もなくなりました。シニア案件は経験やその専門性の高さが故に国内手当に月額 2 万円加算するそうです。何をもって専門性が高いというかは「職種」によるようです。専門家のように医療関係職種に加算されるのでしょうか?更に、「青年」は現行の 40 歳未満を 45 歳までに変更しました。何故でしょう?単に青年海外協力隊の派遣人数を増やしたいだけなのでしょうか?正直よく分かりません。

ここまでの事業改革を見てくると、これからの協力隊事業は昭和 40 年の創業の精神をすっかり忘れてしまったようです。改めて伴正一第 2 代協力隊事務局長の「ボランティアスピリット」を読み返してみると、50 年後の今を見通していた部分がたくさんあります。「協力隊はボランティアである」と言うことは誰も否定しないと思いますが、ボランティアの定義を正しく理解している人は少ないように思います。今や災害ボランティアが主流の日本にとって、ボランティア=無報酬が一般的なようです。

流行語大賞のベスト 10 に残った「スーパーボランティア」のお 爺さんは良い例です。

事業改革を断行するのであれば、世界各国のボランティア団体同様に、全てのボランティア事業の統一しかなかったはずです。過去の色々なしがらみを断ち切って一本化できなかった協力隊事務局の可能性と限界を感じずにはおられません。わずか3年前の50周年記念式典において高らかに宣言した「協力隊、これからの50年」は一体どこに行ったのでしょうか?シニア案件は論外です。

生まれも育ちも異なる 4 つのボランティア事業を一本化することは並大抵のことではありません。「外圧から青年海外協力隊を死守しました。」なんて言っている場合ではありません。名称の問題であれば、英文名称の和訳「日本海外協力隊」に統一すれば日本国内外に分かり易い説明ができたはずです。日本的なしがらみから一歩も脱却できず、有識者から言われるがままに改革を行ったことを協力隊事務局には大いに反省していただきたいものです。

それでも、自ら進んで協力隊事業に飛び込み、今この時、環 境劣悪な開発途上国で悪戦苦闘している老若男女のボランティ アの皆さんの健闘を祈らざるを得ません。

フレーフレー協力隊!頑張れ頑張れ協力隊!

青年海外協力隊千葉〇B会 会長 浜田 眞一 (昭和 51 年度 2 次隊前期、ケニア)



【ツルカナ湖の町ロドワにて】

- 1. 三年頭所感 "協力隊よ、どこへ行く"第3弾(最終回)
- 2. 報告事項
- 3. 現地活動レポート(派遣中隊員寄稿)

2017-4	田中	文絵	ネパール	環境教育	松戸市
2017-3	小倉	達也	モザンビーク	コミュニティ開発	九十九里町
2017-4	服部	蒔子	ソロモン	青少年活動	八街市
2017-3	木村	正樹	ベリーズ	環境教育	市川市
2017-3	小幡	真希子	フィジー	栄養士	松戸市
2017-3	髙橋	実希	セネガル	コミュニティ開発	市原市
2017-4	山崎	大輔	コロンビア	マーケティング	千葉市
2017-3	細川	由衣	モザンビーク	青少年活動	市原市
2017-4	廣沢	渉	モザンビーク	障害児・者支援	柏市
2017-3	工藤	龍馬	マラウイ	柔道	市川市
2017-4	秋元	一美	ベナン	保健師	船橋市
2017-3	大坂	知貴	カンボジア	マーケティング	佐倉市
2017-3	前川	祐香里	ザンビア	青少年活動	東金市
2017-4	高野	優里恵	ベトナム	作業療法士	柏市

4. 編集後記 ☆お知らせ

2. 報告事項

1) JOCA 関東ブロック会議について

11月10日(土)~11日(日)の両日、夷隅郡御宿町にて 平成30年度JOCA関東プロック会議が開催されました。本年 度は千葉県が幹事でしたので、会議場所の選定やスケジュール など事前準備が大変でした。関東ブロックと言っても範囲は広 く、関東1都7県に新潟県と長野県を加えた10都県が一堂に 会します。各県からは基本的にJOCA評議員である会長が参加、 県によっては複数名の参加があり、JOCAからの参加者を加え て合計26名が御宿に集まりました。

1 日目は、幹事県としての開会の挨拶の後、各県の本年度活動報告と関連質問があり、次いで幹事県恒例の講演を行いました。講演者は三次恵美子 OG(H15-1、マーシャル、理数科教師)が「地域起こし」と題して、地元御宿町の地域起こし協力隊としての活動を報告していただきました。任期3年の2年目を迎え、活動が充実していることが窺えました。締めは、梅本JOCV事務局次長に「協力隊事業改革」についてご説明いただきました。丁寧なご説明だったのですが、正しく理解した参加者がどのくらいいたのかは正直分かりませんでした。なんと言

っても、1 日目のハイライトは夕食懇談会です。宿泊先の夕食 もそこそこに各県から持ち寄ったお酒やワイン、お菓子などを 解説付きで披露して、美味しくいただきました。18:00 から 始まった夕食懇談会は20:30 過ぎには解散して、幹事県の大 部屋での2 次会になだれ込みました。ほぼ全員が集まり、車座 になって飲むほどに酔うほどに話は盛り上がり、御宿の夜は静 かに更けていくのでありました。

2日目は、9:30から1日目と同じ御宿公民館に集まり、12:00までの2時間半全てをJOCAのセッションとしました。JOCA関東代表によるJOCA事業概要説明に始まり、宮本常務理事による「会員の拡大」についての説明がありました。JOCADOMIの活用方法についての説明では、千葉県を含めて数県しか利用したことがないとのことで、あまり有効活用されていない実態が浮き彫りになりました。JOCAとしては今後PRに努めて利用促進を図りたい意向です。ここまでであっと言う間の2時間半、JOCAが提案していた内容は他にもたくさんあったのですが、時間切れで中途半端に終わってしまいました。今回のブロック会議を総括すると1日目の充実ぶりに比べて2

日目はお粗末の極みと言えます。会議終了間際に複数の評議員の言った「この会議は JOCA 主催でしょう。」が全てを物語っているように思いました。

ともあれ、2 日間の会議は何とか終わったのですが、この後 が一番のお楽しみ、オプショナルツアーです。地元の三次 OG にコースを設定していただき、会議会場の御宿公民館を車3台 に 14 名が分乗して出発しました。まずは民家を改装したレス トランでおしゃれな昼食、次は月の砂漠の像を通り過ぎ、小浦 海岸に向かいました。そこは観光客は決して行かないであろう 三次 OG のお気に入りの場所で真っ暗なトンネルを抜けた先に ある断崖の洞穴、目の前に海が広がり、素晴らしい景色です。 昔は海女さんや漁師さんが船をこぎ出した場所とのことで、小 さな入り江になっていました。ちょっとした探検隊気分です。 すぐ近くにはメキシコのドン・ロドリゴ総督が漂着した場所が あり、記念碑を見学して、最後のメキシコ記念公園に向かいま した。高台から見る太平洋は青く広がっており、参加者全員で 記念写真を撮って、御宿駅を経由して公民館に到着、ツアーは 終了しました。お天気にも恵まれて、参加者は満足して帰途に 就いたと思います。皆様方お疲れ様でした。



【会議の様子(第1日目)】



【会議の様子(第2日目)】



【関東ブロック会議後の記念撮影(御宿公民館前)】



【ドン・ロドリゴ総督上陸地 碑にて記念写真(オプショナル)】

2) JICA エッセイコンテストについて

今年も JICA エッセイコンテストの中学生の部を受け持ちました。応募総数は 1,800 弱で前年並みの作品が集まりました。 9月22日(土)に応募作品を在宅審査委員(11名)に送る作業を行い、10月13日(土)に浦安市国際センターにおいて一次審査を行いました。結果、9作品と2作品の補欠を選考して2次審査に送りました。一次審査員を毎年やっていていつも思うことは、中学生の考えの幅の広さです。選ばれた作品のタイトルだけをとっても、「地球人になる」「様々な幸せの形」「心を豊かに」「私を変えた三日間」など「これが中学生?」と思われる作品が多数あり、選ぶのにかなり苦労しました。これから2次審査、最終審査を経て、来年2月には表彰式が行われます。今年も千葉県から優秀作品が選ばれれば嬉しいなと思っています。

3. 現地活動レポート(派遣中隊員寄稿)

2017-4 田中文絵 ネパール 環境教育 松戸市

ネパールに来て早8カ月が経とうとしています。任地はネパールの一番東インドのダージリンとの国境近くのイラムという所で、茶畑広がる緑豊かな環境です。街中は坂道だらけなので毎日とてもいい運動になっています。最近ではダサイン、ティハールというネパールの大きな祭りが2つ続き、ネパール人にお呼ばれをされる事や、大家さんと一緒に過ごす中で文化も知る事ができとても楽しく過ごしています。食事では民族によって食べる肉が異なることもありますが、イラムは豚肉を食べる民族も多く住んでいるのでチキン・マトン・ポークといろんな肉も手に入ります。先日「納豆が好き」という私の話を覚えていた同僚が、納豆をごちそうしてくれました。ネパールでも一部の民族は納豆を食べるそうです。見た目も味もほぼ一緒でした。

活動面で今行っている事は、毎日のゴミ収集をマネジメント している人の同行や市役所委託の環境課が行う活動を共に行っ ています。ゴミ収集はイラムのゴミの現状を知る事ができるの で続けています。学校に行った際、ゴミのポイ捨てはいけない という事を子ども達に問いかけると、ほとんどの子はいけない ことと分かっています。しかし、言葉とは裏腹に小さいお菓子 のゴミなどポイ捨ても多く見られます。子ども達に、お菓子の ゴミを道に捨てたら何年後に土に還るか知ってる?とクイズを 行うと「1カ月」「6か月」「2年」と様々な答えが出てきます。 「正解は、、、30年!!」「ペットボトルだったら450年!」 と伝えると「えーーーーーー!!!!」と驚く子ども 達。この驚きから少しでもポイ捨てが減り、又、本来は大人が 子どもに伝えていくべきですが、子どもから家族へ今日こんな ことしたのと話してくれたらいいなと思っています。学校や住 民に向けたカリキュラムでは日本の話も少し例にあげています。 日本も60年前くらいとても汚い町だったという事。開発を目 指し病気も増えた事。その後だんだんと環境の事を考え、学校 では毎日掃除の時間があり、清掃の習慣ができたという事。な ど話しています。カリキュラム以外でも、時々学校や幼稚園に も時々伺い子ども達との交流も楽しんでいます。もともと保育 士だったこともあり、幼稚園では手遊びや絵本を翻訳し呼んだ 後に自然に目を向けるような遊びも行っています。子ども達の 笑顔を見るとこちらまで嬉しくなります。

8 カ月経ち知り合いも増えてきました。雑談の好きなネパール人。話して行く中で沢山の人が、沢山の事を教えてくれます。 そんな日々の交流も楽しく、2 年間で私がここにいたという足 跡を残せたらいいなと思いながら、感謝の気持ちを忘れずこれ からも励んでいきたいと思います。

(時々チーバ君 T シャツも着ています!笑)



【スクールプログラム:ゴミの分別ゲームの答え合わせ中!】



【任地イラムの茶摘み風景】



【サリーを着て結婚パーティーの帰り道】

2017-3 小倉達也 モザンビーク コミュニティ開発 九十九甲町

Bom dia! (ボンディーア) ポルトガル語で「おはよう」という挨拶です。

初めまして。小倉達也です。現在、アフリカ南部のモザンビークという国でコミュニティ開発隊員として活動しています。うわーアフリカだ!暑い!人が黒い!ごはん(シマという、トウモロコシの粉を練ったもの:モチみたいな感じ?)手で食べてる!鳥が生きたまま売られてる!などという驚きが今年(2018年)1月に着任したときにはあったものの、もはやそんなことは完全に慣れて週末になれば一人でも鳥を捌いて新鮮なレバーやハツを網焼きにして舌鼓を打ちつつ、任地での生活を楽しんでいる今日この頃です。レバーは得意ではなかったのですが、自分で捌いたものは格別です。旨い!!

さて、貴重な会報のスペースを頂いて何を書こうかと思案したのですが、先日体感した地元を思い出した瞬間について書こうと思います。それはナンプラ州内のビーチを訪問した時でした。ぼろい木のボートで海に出ようとしている子供たちがいました。全部で8人くらいだったか、船を左右に振りながら少しずつ波打ち際に向かって移動させる子供たち。車なんてないし勿論自力です。一番大きな子が16歳くらいでしょうか。小さい子は10歳未満だったと思います。その子供たちが海で漁をするというので、少しだけ船に乗せてもらいました。異文化体験・国際交流ってこういうことやろ!と訳の分からない意気込みがありました笑

小学生~高校生くらいの 10 人程度で船を出して漁をする子供たち。逞しいなと。それに比べて自分は 30 歳にもなって子供たちの船に乗せてもらって何やってんだかなぁと。そんなことを考えながら船は沖に・・・出ない!波打ち際を流れながら網を仕掛けていきます。そして、そういえば子供が2人ほど船に乗らずに浜辺で網を抱えてる。。。なんだこれ?

状況が呑み込めない自分を置き去りに、子供たちは慣れた手つきで網を仕掛けていく。そして今度は船が U ターンして逆側へ走りながら網を仕掛けていく。そして、網が仕掛け終わると今度はみんなで網を引っ張り始めた!

もうお分かりでしょうね。そう地引網です。自分が小さいころには地元でも頻繁に開催されていて、結構参加してました。ただ小学 5,6年くらいになると「だるい」とか「ださい」とか言って行かなかったりしたんですよね。そんな地引網を、まさか十数年ぶりに地球の反対側で見ることになるとは!なんか嬉しくなって自発的に手伝っちゃいました。「なるほど地引網~、まさか地球の裏側でやることになるか~!!」

釣果と言えばあんまり大漁ではなかったんですが、個人的にはなんかいい感じのもの引っかかった感じでした。異文化体験しようとしたら自分の原体験に触れてた。国際交流ってこんなこともあるんですね。



【船を移動させる子供たち】



【網を引いている様子】

2017-4 服部蒔子 ソロモン 青少年活動 八街市

日中は日差しがとても強く、地元の人でも激しい運動は避けるほど暑いソロモンでは、日常生活でも仕事のときでも履物といえばビーチサンダルです。そしてソロモン人は日本人と同じように、室内に入るときにはビーチサンダルを脱ぎます。ただソロモンでは部屋の「内」と「外」の境界線が非常にあいまいです。例えば、私が勤務している図書室や市役所、村の集会所(四方に壁がなく、外との隔たりはない。)などの公共のスペースに入るときにも多くの人が履物を脱ぎます。反対に、部屋の外に出ようとするとき、もしも目の前に自分のビーチサンダルがなければ、裸足のまま外に出たり、そのまま学校に行って、一日過ごして帰ってくることさえあります。履物を履いていないことが貧しさの象徴であるということはなく、そのために劣

等感を感じることは全くありません。大人も子どもも畑を耕して自給自足をする村人も高給職である役所に勤める人も誰もがビーチサンダルを履いて外に出ることもあれば、裸足のままどこかに行ってしまうこともあります。家の中で履物を脱ぐことは、室内を清潔に保つことが大きな理由だと思いますが、その他の理由として、同じ空間にいる人やモノとの隔たりを取り払い、ありのままの姿で付き合うことの表れでもある気がします。そのため、裸足でどこへでも行ってしまうソロモン人を見ると、まるで「地球」というとてつもなく広大な家の中を歩き、そこで生きる「人」はもちろん、ココナッツやバナナなどの木々や果実、豊かな大地や海、自由気ままに歩き回る鶏や犬、猫などの動物たちと、肌と肌を触れ合わせ、お互いの体温を感じ合いながら「家族」として生きているかのように錯覚します。

日本で生活をしていると、人工物に囲まれた場所こそが人間の生きる世界であるかのように思ってしまいがちですが、人間であることの定義というのは、二足歩行をする、体毛が薄いなどの生物学的な特徴だけであって、その他のことは人間の高慢さが生み出した思い込みに過ぎないのかもしれません。人間という生き物は、日本人が思っているほど大層なものではないということをソロモン人に教わった気がします。



【現地の子どもと筆者(左)。右の女性は裸足】



【放課後の小学校。先生も裸足】

2017-3 木村正樹 ベリーズ 環境教育 市川市

赴任して間もなく、私が最初に感じたことは町がポイ捨てゴミだらけで汚いということ。そして、日本で生活していた頃は一回も名を耳にすることのなかった「ベリーズ」という遠い離れた国に、日本のお隣さんの中国系の人がこんなにも多く生活しているのかととても驚きました。その衝撃と同時に日本という国や文化そして日本人について町の人に知ってもらいたい。また、町を綺麗にしていきたいという気持ちを抱いたことを今でも昨日のことの様に思い出します。

「世界は誰かの仕事でできている。」

任地ベリーズのオレンジウォーク町に派遣され、1年間環境 教育活動を行ってきた中、最近この言葉を痛感する出来事があ りました。

2017年度3次隊によって行われている世界ゴミ拾い活動。

私はパラグアイの隊員からバトンを受け取り、ゴミ拾いを行 いました。他の隊員らは現地の方々と一緒にゴミ拾いを行って きたのですが私は、どうせやるなら何か変わったことがしたい。 という欲がでて、配属先である町役場のゴミ拾いの仕事を経験 させてもらうことにしました。その仕事内容は、朝から夕方ま で道端のゴミを拾い続けるというもので、月~金毎日働いて、 彼らの週給は約1万円。1ヶ月間の経験を通して、安全グロー ブをくれたトラックのおっちゃんや疲れて休む私を横目に道具 を借りて自主的に掃除をするおっちゃんらに出会えた嬉しかっ たことや、反対に集めたゴミの上に駐車されたり、(通学路がと ても汚いので始業前までに綺麗にしたいが、朝8時を過ぎた頃 から送り迎えラッシュに巻き込まれる) 私有地の掃除を命令さ れたりと嫌なことも多々ありました。加えて、私が私服のとき と清掃員の格好でいるときとで人々の対応が異なり、私達はい つ頃からその人自身を職業というものさしで判断するようにな るのだろうと考えさせられました。

それら経験より、「ポイ捨てする人が減らなければ、ゴミを拾い続けないといけない」ということに辿り着き、これまで活動の軸であった小学校での環境教育に更に力を入れて行っていきます。



【小学校にて環境教育を行う様子】



【ゴミ拾い活動を行っている様子】

2017-3 小幡真希子 フィジー 栄養士 松戸市

フィジーの首都スバから 70 km程離れた小さな島、オバラウ島。旧首都であったレブカという街の病院に栄養士として派遣され、10 か月が過ぎました。大洋州では NCD が大きな問題となっていて、フィジー保健省も NCD 予防対策には力を入れています。私の任地であるオバラウ島には、小さなタウン1つと24 の村があり、フィジー本島の都市部に比べ、比較的昔ながらの生活が残っており、ヘルシーな印象があります。都市部では食事の選択肢が増えてきていますが、ここではその選択肢が少ない。Rootcrops(キャッサバやタロイモ等)やココナッツ、Rourou(タロイモの葉)や Bele(少し粘り気のあるスピナッチの様なもの、挿し木で簡単に生えてくる)、バナナやパパイヤ、レモングラス・レモンリーブティー等、フィジーで昔から食べられている食習慣が残っています。活動量の面を見ても、子供た

ちが海で遊んでいる姿よく見かけますし、大人も体は大きいですが、ラグビー・バレーボール・スンバ(ダンス系エクササイズ)など大勢で楽しむスポーツは好きなようです。

しかし、ローカルフードの摂取が保持されている一方、バターたっぷりのブレッド、ティーには食事用スプーン1~3杯分の砂糖、ヌードルや缶詰(ツナやコンビーフ等)、ジャンクスナック等もポピュラーです。

レブカ病院での活動は①外来・入院患者の栄養相談、②病院 給食のマネジメント③小学校やコミュニティー等でのスクリー ニングと栄養教育、④ヘルスセンターでの母子保健事業、⑤病 院スタッフの健康促進支援など、多岐に渡っています。日常業 務を通じて、カウンターパートに少しずつ変化が出てきたよう に感じます。この島は原住民系のフィジー人(イタウケイと現 地で言われています)が大半を占めていますが、カウンターパートはこの地域ではマイノリティーのインド系フィジー人です。 業務や悩みを共有していく中で、イタウケイのスタッフやコミュニティーへも以前より積極的に関わるようになったと感じています。(フィジーは大洋州の中では珍しい多民族国家、イタウケイフィジー人が5割程度、植民地時代にサトウキビ栽培のために移住したインド系フィジー人が4割程度います。)栄養指導では、患者の話を聴く姿勢も見せるようになりました。

また、日常業務の他に、オバラウ島にある大きな缶詰工場(従業員800人6~7割が女性)でのヘルスプロモーションを取り組みたいと思っています。一度、工場内のCanteen(売店)や従業員のランチチェックに行きましたが、その後なかなか話が進んでいないのが現状です。

活動期間1年を残して、活動への難しさも感じています。今後のアプローチの仕方を少し見直そうと考えています。



【ビレッジにて スクリーニングと栄養指導



【土曜日のマーケットの様子】

2017-3 高橋実希 セネガル コミュニティ開発 市原市

新天地での生活に期待と不安を背負って成田を飛び立ち、アフリカ大陸の西の端、セネガルに降り立ったのは昨年 1 月のこと。飛行機を降りて、もわっとした生ぬるい空気に包まれたとき、冬の日本の澄んだ空気とのギャップに「あぁ、たったいま私の 2 年間がスタートしたんだな」と、感動と覚悟が入り交じった不思議な感情が湧いてきたのを覚えています。あれから 10 か月の時を経て、私の体も少しずつ灼熱のアフリカ仕様に変化を遂げ、今では 1 月がセネガルの 1 年の中でも最も涼しい月だということを実感しています。

この度、OB 会の皆さまに任国での暮らしを紹介する機会を与えていただきました。配属先であるジョフィオール保健区での活動、任地の新しい家族について、おいしいと評判の郷土料理のこと。書きたいことはたくさんありますが、今回はセネガルでの人と動物との関わりについて紹介しようと思います。セネガルで動物と接する時、それは私にとって嬉しくもあり、悲しくもあり、そして大きな悔しさを覚える、最も感情が豊かになる瞬間の一つです。

私の住むジョフィオールは首都から車で約3時間、舗装された道路が1本だけ走るのんびりとした田舎町です。町のほとんどは砂道で、移動にはシャレットと呼ばれる馬車が欠かせません。馬が引くシャレットは主に遠方への移動に、ロバが引くシャレットは井戸水などの重い荷物を運ぶために使われます。初めてシャレットに乗って村に出かけた時は、カメラを片手には

しゃいでいました。また、多くの家庭が食用や販売目的で羊やヤギ、鶏などを飼育しています。知人の家に行けば、まるで動物園のふれあいコーナーに来たかのような感覚を味わうことができます。家畜は彼らにとって財産です。足にもなり、腹の足しにもなり、困った時にはお金に換えることもできます。でも、そんな財産も夕ダでは維持できません。その餌代を浮かせるために、多くの家庭が家畜を放し飼いにしています。財産であるはずの彼らは、毎日外へ出かけていっては、空き地や道に捨てられたごみの中から自分たちが食べられるものを必死に探しています。ごみの山を漁る動物たちの姿は、何度見ても胸が痛くなる光景です。

セネガルにいると動物たちなしでは私たちの生活が成り立たないということを実感する一方で、私たちの暮らしがいかに彼らを苦しめているかを考えさせられます。それは日本で生活していた頃も一緒で、ただ、動物と自分自身の距離が遠かったから感じることができなかったのだと思います。任期を終えて帰国した時、食卓にあがる肉を見て「ここに来るまで彼らがどんな時間を過ごしたのか」そんなことを考えられる人間になっていたいなと思います。



【空き地に捨てられたゴミを漁るヤギたち。何度見ても切ない 気持になる日常風景です。】



【私が持ってきたブラシで一生懸命ブラッシングをする子ども たちと気持ちよさそうなロバ。】

2017-4 山崎大輔 コロンビア マーケティング 千葉市

私は2018年3月より南米コロンビアの首都ボゴタに派遣されています。配属先である国立の職業訓練校(SENA)にて、商業コースのカリキュラムの見直しをしています。SENA は貧しい子女に無償で職業訓練を行う機関であり、私の活動する学校には約400人の生徒と30人の先生がいます。

赴任当初は、マーケティングの最新知識や日本での事例を先生に教示してほしいということで 15 テーマについて資料を作成しました。また資料の作成と並行して、生徒には日本のことを正しく理解し、好きになってもらえるよう、日本の文化紹介を行っています。生徒の多くは 6 か月ごとに入れ替わるので、この活動は 2 年間継続して行っていく予定です。

また、生徒のモチベーションを上げられるような授業をしています。生徒は卒業した後スーパーで働きますが、スーパーでの業務は単調な作業が多く、モチベーションを維持することが難しいからです。日本をはじめとする世界の小売業の現状や可能性について話し、商売の方法やマーケティングを学ぶことで、世界で活躍する可能性があることを伝えています。また私はCSR(企業の社会的責任)部門で働いていたので、その経験を生かし、世界の環境問題や貧困問題などを取り上げ、倫理的な面で生徒の視座を高くするような授業を行っています。

コロンビアは太平洋とカリブ海の2つの海に面しておりアンデス山脈もあるため、地域により気候や文化が様々です。水が豊富で野菜や果物が安く、美味しい食べ物がたくさんあります。私のオススメは「アヒアコ」という3種類のジャガイモを煮込んだスープです。ボゴタの伝統的な料理で、多くの家庭で人が集まる機会に良く食べられます。

職場の休みを利用し、コロンビア最南端の町レティシア、最 北端のサンアンドレス島に行きました。レティシアはアマゾン 熱帯雨林の入り口の町で、そこからボートでアマゾン川を上り、 小さな集落を訪れました。そこに住む人々の生活を体感でき、 貴重な経験となりました。サンアンドレス島はカリブ海に浮か ぶ小島で、7 色の海と呼ばれるその海はとても綺麗でした。本 土から距離が離れていることで、文化や雰囲気が大きく異なり とても面白かったです。

JICA ボランティアとしてコロンビアに赴任し、多くの得難い経験をさせてもらっています。派遣要請を全うすることは当然として、1 人でも多くの人に日本を好きになってもらうこと、また2年間の活動終了後も日本とコロンビアを繋げられる存在になれるよう、様々な経験をしていきたいと思います。



【同僚の先生たち】



【授業風景】

2017-3 細川由衣 モザンビーク 青少年活動 市原市

初めまして、こんにちは。モザンビークで青年海外協力隊として活動しています、細川由衣です。私が活動している場所は、モザンビークの北部に位置する、モザンビーク唯一の世界遺産「モザンビーク島」です。全長3km程の小さな島で、島よりも長い約4kmもある橋で大陸と繋がっています。私はそんな小さな島の中で、小学校の先生として活動しています。

モザンビークの小学校は7年生まであり、私はモザンビーク島の中にある3つの小学校のうちの1番小さな「6月25日小学校」で、6年生・7年生に音楽・美術・体育の教科を教えています。最初は慣れないポルトガル語で、教科書の内容を黒板に写すのにも精一杯でしたが、少しずつ言語や同僚、子供たちにも慣れ、今では授業の中に歌やダンスなどの実技内容を取り入れながら楽しく授業をしています。また、授業とは別にクラブ活動も教えています。先輩隊員がソーラン節などを教えてい

た「日本ダンスクラブ」に加えて、「ピアニカ」と「日本語」の クラブを新たに立ち上げ、週に 1 回ずつ放課後に教えています。 日本語クラブでは日本語だけでなく、かるたや浴衣を用いて日 本の文化も教えており、島で生徒にあった際には「おはよう、 先生」と言ってくれるようになりました。ピアニカクラブは毎 週来る子供たちがバラバラですが、練習を重ね、弾ける曲も少 しずつ多くなってきています。次はモザンビークの国歌に挑戦 し、島のイベントで日本のダンスと共に、子供たちに発表して もらいたいと考えています。

モザンビークに来てもうすぐ 1 年が経とうとしていますが、 私は最近になってようやく島の人たちの生活に馴染めてきたように感じます。モザンビーク島の人たちはとても人懐っこく、 近所に買い物に行くだけでも「アミーガ(友達)!元気?」とみんなが話しかけてきてくれます。また、モザンビークの公用語であるポルトガル語の他に、北部の現地語である「マクア語」がモザンビーク島では話されており、マクア語で話しかけると現地の人はとても喜んでくれます。最近は挨拶だけでなく、簡単な単語や文章も言えるようになり、それだけでも現地の人はすごく褒めてくれるので、島の人たちと共に現地語も楽しく学ぶことができています。

モザンビークの学校は11月で授業が終わり、12月・1月は年末年始休み、2月からまた新学期が始まります。1年目は慣れるのに精一杯で、時間が経つのも早く、やり残してしまったことがたくさんありました。2年目はそれらの反省も踏まえ、より良い活動にできるよう、そしてさらに島の人たちとの絆が深まるように努めたいと思います。



【音楽の授業風景】



【体育の授業後に生徒たちと】

2017-4 廣沢 渉 モザンビーク 障害児・者支援 柏市

私が協力隊に応募した動機は「相互理解の深化」の為です。 あっっ! と言う間に赴任以来7か月が過ぎ去りました。 「今」という現実の実感が抜け落ちているから時間があっとい うまに過ぎていると感じるのでしょうか。たまに自分は今ゲー ムの世界の中に入っているのかしら?と思うことがあります。 それぐらい日本での暮らしと、ここモザンビークの暮らしには 違いがあります。見るもの、聞くもの、におうもの、食べるも の、感じるもの全てが違います。少し大げさかもしれませんが、 ここでの暮らしに私と他者の間に共通点があるとしたら同じ 「人間」ということのみでしょうか。

2018年4月、障害児・者支援員(新規派遣)としてアフリカの南東部に位置する国モザンビークに赴任しました。首都マプトで1か月の語学訓練の後、5月より任地であるマトラ児童保護施設に着任し6か月(※11月現在)が経ちました。

この施設には約80人の孤児達(そのうちの80%が知的、 身体等の障害児)が寝食を共にしております。ここでの私の期 待される役割は①日中活動(歌、運動、レクリエーション等)を提 案し、スタッフと協働して実施する事。②身近な材料を使った 簡単な作業を提案し実施する事。③活動を通してスタッフへの (障害児・者ケアについて)指導・助言を行う事。であります。

今現在、室内装飾物の作成、自己紹介カードの作成、サッカー、施設外散歩等の活動を行っています。着任当初、私がここで何か活動を提案し、実施するなんてことは、到底無理!ムリ!無理!帰りたい!と思っていました。ともあれ月曜~金曜、7時半~15時半。共に働き、遊び、食べ、飲み、同じ時間を過ごす中で少しずつお互いの理解が進み、そして少しずつ関係性が出来上がってきたのかなと。そしてその中で活動のアイデア

が浮かび、それを実行出来るようになってきたのかなと。今日 この頃感じています。

より良い活動の為には良好な人間関係(相互理解)は不可欠だと思います。今後はまだまだ浅い関係性の深化に努め、良好な人間関係を築き、そしてその中で施設の子供たちに合った活動を提案、実施していきたいと思っています。

今でも帰りたいという気持ちは少しありますが、それよりも 活動の事を考えねば。。。 なんて思ったりしています。

子供たちが喜んでくれる活動が出来るといいな、、、



【元気モリモリ男の子】



【他ボランティアと子供たち】

2017-3 工藤竜馬 マラウイ 柔道 市川市

一 マラウイにおける柔道指導 一

私は現在、アフリカのマラウイという国で、柔道の指導にあたっております。マラウイは世界最貧国のひとつですが、"Warm Heart of Africa"という呼称があるほど気候も人々もとても穏やかで、大変心地よく生活をさせて頂いております。私の現在の主な業務は、首都リロングウェにある Kamuzu Institute Judo Club (KIJC)での指導です。ここはマラウイ柔道の中心地で、主要選手の殆どが集まって日々稽古に励んでおります。とは言ってもまだこの国では柔道自体がマイナーであり、実際のところアクティブな柔道家は少なく、KIJC でさえも、私が赴任するまでは指導者もおらず、道場も狭く、柔道着もボロボロ。幼い子供たちから国際大会の代表クラスまでが一緒に稽古をしている状況です。それでも皆強い情熱を持って柔道の稽古を継続して来てくれました。これは本当に尊敬に値することで、私もなんとか自分の役割を果たし、マラウイ柔道の発展に寄与したいと強く思います。

任期の2年間で自分に何が出来るかを考え暫く試行錯誤した上で、ここまでの約1年は、KIJCの中心メンバーを将来のマラウイ柔道の核とすべく、徹底的な基礎固めを続けて参りました。彼らは柔道歴も6~7年程度あり、基礎に立ち返っての稽古を退屈に感じるのではと不安でしたが、基礎の大切さと、そして何より柔道自身の面白さを信じてこの指導方針を貫きました。結果、皆本当に素直についてきてくれて、技術レベルは確実に上がり、柔道自体への理解も深まっており、責任の重さを感じつつも、少しずつですが、手応えを感じ始めております。残りの1年強は、マラウイ北部/南部の拠点の強化をしたいと考えております。現在はここ中央が他を圧倒しておりますが、並行して出張指導をしてきた首都近郊のDzaleka難民キャンプの選手達が国内大会で良績を残してくれたように、国内での更なる健全かつ高いレベルの競争を喚起することが狙いです。

また、4人の選手が参加し私もコーチとして帯同した世界柔道 選手権は全員初戦敗退、世界ジュニア柔道選手権はマラウイ柔 道協会の手配不備で大会への参加そのものがキャンセルとなる 等悔しい思いをしました。予算、経験等の不足で思うように行 かないことも多いですが、2019 年は選手・協会共に出来る限 りの準備をして、国際大会でまず一勝を挙げることを目標と致 します。

そして、ここマラウイで一人でも多くの人が柔道を知り、楽しみ、好きになり、続けてくれることが、私の何よりの目標です。そのために、まず自分があらためて柔道を学び、稽古し、誰よりも楽しんで、それを伝えて参りたいと思います。



【KIJC 稽古風景】



【世界選手権参戦】

2017-4 秋元一美 ベナン 保健師 船橋市

「ベナン」という国をご存知ですか?西アフリカに位置し、トーゴとナイジェリアに挟まれた面積が日本の1/3ほどの小さな国です。有名人は、たけし軍団としてテレビでも活躍していたゾマホンさん。しかし、検索してもそれ以上の情報が出てこない…。そう、ベナンはとてもマイナーな国。かく言う私も派遣が決まるまで、ベナンという国を知りませんでした。ほとんど情報のないまま旅立ち、早7ヶ月が経ちました。到着したときに先輩隊員から言われたのは「ベナンは何もないけど人は凄く良い」という言葉。初めは何もないの!?と思いましたが、今ではよくわかります。確かに日本のように何かがたくさんあるわけではないけど、ベナンの人々との日々のふれあいの中で生

き方や考え方、過ごしてきた環境や歴史などいろいろ知るにつれて、良いところ、面白いところ、ちょっと面倒くさいところなど色々な面が見えてきました。

「Tu as fait un peu?」(トゥ ア フェ アンプ?)と活動中や帰り道に必ず聞かれ、「今日はちょっと働いた?」という意味の言葉です。ベナンの人々曰く、たくさん働くのは疲れて体に良くないため、少しが丁度いいということから出来た言葉で、現地語を直接フランス語にしたのでベナン限定フレーズです。ベナン人と一緒に仕事をしてみると、仕事中は適度に休憩・お昼寝、昼休みはたっぷり3時間、雨が降ったらお休みなどなど、日本での日々を考えるとどれも、なんてことだ…な事ばかりで、怠けているだけでは?と思ってしまいました。歩きながら食べ物や雑貨を売る売り子さんや美容院、仕立て屋、タクシー運転手など自営業の人が多いので自分のペースで働ける人が多いということもありますが、それにしてもベナン人は無理をしない。しかし、この働き方はベナンでは正解なのかもしれない…と思うこともありました。

配属当初、日本の感覚が抜けないこと、やる気が最高潮だっ たこともあり毎日フルパワーで過ごしていました。もちろん 「Tu as fait un peu?」と聞かれると、たくさん頑張ったよ! と返答。しかし、ベナンの暑い気候の中で動き続けることはと ても困難で、慣れない環境ということも相まって案の定体調を 崩してしまいました。このままでは体がもたない...郷に入れば 郷に従え!とベナン人に倣った働き方を導入してみることに。 すると、無理しなくなった分、体力も維持することができ、無 理しなくなった時間を持つことで活動について自分なりのペー スをつくることができました。正解かはわかりませんが、あま り動かないのは暑さへの対処法、ベナンの人々は自分のペース を持つのが上手いのだと思います。日々時間に追われる日本で 派の生活の中で忘れていた、自分のペースというものに気づけた 気がします。時々、このままベナンのペースでいて、日本に帰 って働けるのだろうか…と思うこともありますが、今は「Tuas fait un peu?」と聞かれると「Oui!」(うん!)と答えていま す。



【保健センターでのマラリア予防啓発活動の様子】



【近所に住む優しいママ、売り物は頭に乗せて運ぶ】

2017-3 大坂知貴 カンボジア マーケティング 佐倉市

私は、2018年1月より、カンボジア南西部の州、カンポット で観光マーケティングの仕事をしています。

カンポットは、首都プノンペンから約150km、車で3時間ほどの場所にある、自然豊かな観光都市です。西に広大な海、東に大きな山。市内にはフランス植民地時代の建築物やカフェが立ち並んでいます。街の雰囲気はいつも穏やかで、都会の喧騒や忙しなさとは全く無縁の世界です。そのためか、街に住む人々の性格も、どこかのんびり、おっとりしているように感じられます。

「都会の暮らしを忘れて、静かなところでゆっくり過ごしたい」。 そんな時に絶好の"癒し"を与えてくれるリラックス空間。カンポットはそんな街です。

近年、海外からの観光客数はどんどん増えてきており、ホテルなどの周辺施設も増加。今後、さらなる発展が見込まれています。こうした状況から、「あまり支援の必要な地域とは思えない・・・」

そう考える人もいるかと思います。

しかし、カンポットには、現在大きな問題が立ちはだかっています。

それは「家賃・物価の上昇」。近年、カンボジアでは中国企業の 土地の買占めが問題となっています。買占めにより地価が急激 に上昇、家賃が以前の数倍に跳ね上がっているのです。家賃の 上昇が、さらに日用品の物価上昇をも引き起こし、現地の人々 は生活苦を強いられています。住みなれた街を出て、別の州に 移り住まざるを得ない人も多いのが現状です。

目に見える「貧困」とは違うものの、そこには確かに「困っている」人がいるのです。彼らのために何ができるだろうか。 同僚と日々模索しています。

解決策となりうるのが「カンポット・ペッパー」の普及活動。これは、州の名産品で「世界最高級の胡椒」と言われているものです。品質の高さ・薫りの高さで有名な逸品で、「TIME」誌が「カンポット・ペッパーは胡椒界のボルドー・ワインだ」と絶賛したことでも話題になりました。現在欧州を中心に輸出され、特にフランスの一流レストランで大人気を博しています。しかし、アジア圏では、まだまだ知名度が低いのが現状です。そこで、現在、外国人向けのフリーペーパーや情報誌、各種ウェブサイトにカンポット・ペッパーの情報を掲載し、知名度の上昇を図っています。

今後、さらに知名度を上げ、カンボジアの定番お土産として 定着させたいと考えています。お土産の売り上げが増えれば、 その分農家の収入が上がり、物価の上昇にも対応できるからで す。この活動がどれくらいの成果をあげられるかはわかりませんが、今後もカンポットの産業の発展、ひいては地域住民の収入向上のために、できる限りのことをやっていきたいと思います。



【大きく実ったカンポット・ペッパーの実。これを収穫し乾燥 させると、一般的な黒ハコショウになります。】



【収穫後、コショウを選り分ける農家の人々:熟れたものは赤 コショウとして別途販売されます。】



【カンポットの街並み:100年前に建てられたフランス植民地時代の建築が現存する、貴重な文化遺産です。】

2017-3 前川祐香里 ザンビア 青少年活動 東金市 ーザンビアでの大切な教えー

ザンビアに赴任して 1 年、たくさんの学びがありました。それは時に私の活動を調整してくれるものであり、人としてより良く生きるヒントでもありました。その中から、最近の学びを2つ紹介させて頂きます。

1 つ目は、人を助ける心についてです。日々の生活の中でお 金や物を求められることが多々あります。求められるがまま手 を差し伸べることは簡単だけれど、それで本当に相手のために なるのか?国際協力や支援、助けるということについて頭の中 ばかり忙しい私に、小さな子どもたちが忘れてはいけない一番 大切なこと思い出させてくれました。私の配属先は主に経済的 な理由により学校に通えない子どもたちに対し教育の機会を与 えることを目的としており、カトリック系教会から様々な支援 を受けて運営されている幼稚部から 7 年生までを対象としたコ ミュニティースクールです。ある日の朝礼で校長先生が児童に 「私たちは日々多くの支援を受けています。でも私たちの周り にはもっと助けが必要な人たちがいます。私たちもできること から人を助けることを学び行動をはじめましょう。」と呼びかけ ました。約2週間後、幼稚部の子3人と小学2年生の子2人が 50 ングェ (約5円) ~1 クワチャ (約10円) をそれぞれ持 って校長先生のところにやってきました。お菓子を買うために 持っていたお金を持ってきたのです。誰に、どのようなことに 使われるかも分からない、それはただ困っている人の力になり たいというとても純粋で愛にあふれた精神と行動でした。求め られることに対しとるべき行動はまだ分からないけれど、頭ば かりで心をおいてきぼりにしないこと、そして淀みのない心の あり方を子どもたちが教えてくれました。

2つ目は、「変化」のうみだし方についてです。2018年10月に3週間、日本で実施されるJICA主催のKnowledge Co-Creation Program (アフリカの教員対象の初中等理数科を向上させるための研修)に同僚教員が参加しました。帰国後「素晴らしいチャンスをありがとう!君は僕の目を覚ましてくれた!」と興奮冷めやらぬ様子で日本での研修の話をしてくれました。研修で体験した理科の実験に感動し、興味を持つことで学びがはじまる!と、ザンビアの理論中心の指導方法を変える意欲を持ちました。現在、彼と理科の授業の改善を始めたところです。知識や技術を伝える時、どんなに相手にとって必要と思われることでも本人に行動に移すほどの意欲に繋がる関心がなければなかなかスムーズに進みません。学校教育も国際協力もいかに相手の好奇心に火をつけることができるかがポイントなのだと感じさせられました。彼の経験から、私自身も夢を

持ったり変化が生まれたりした時、そこには何かしらの「体験」があったなと、体験することの重要性をあらためて認識しました。この同僚は、参加前はお金を貯めて家や車を購入したいと考えていましたが、現在はそのお金を専門性を深めもっと影響力のある人材になれるよう 4 年制の大学への進学(ザンビアの初等教育の免許は 2 年制の大学で取得可能)、さらに奨学金を得て大学院への進学を目指しています。今まで知らなかったことを体験し、興味を持ち、視野が広がり、行動次第で未来を拓けることを確信し、今を変えはじめています。

残り 1 年、ザンビア人と学び合いながら一緒に身近な人をエンパワーメントしていけるよう活動していきたいと思います。



【募金をした児童5人】



【日本での Knowledge Co-Creation Program に参加した同僚教員】

2017-4 高野優里恵 ベトナム 作業療法士 柏市

養成校卒業後、作業療法士として急性期病院に6年間、回復期病院に2年間務めたのち、青年海外協力隊に参加しています。 2018年3月末に渡越し、ホーチミン市8区にあるリハビリテーション病院に派遣されて現在7ヵ月が経過しました。現職参加制度を利用し、現在も日本の回復期病院に在籍しています。 食事や暑さにも慣れつつありますが、まだまだ日常生活でのコミュニケーションでさえ困難さを感じています。

現在、ベトナムには作業療法士という資格は存在していません。このため、理学療法士が作業療法を実施しています。養成校がないため、海外支援や海外研修により作業療法を学んだ経験を有する理学療法士が所属している病院にて、半年未満の研修を受けたのちに理学療法士が作業療法を患者様に提供しているケースが多いです。このため、患者様はもとよりセラピストの作業療法に対する知識が乏しい現状です。また、リハビリテーション自体の社会全体での認知度や信頼度もまだまだ低いように思います。ベトナムは既に高齢化社会に突入しており、高齢化スピードは日本を含む先進国に比べてもはるかに速いです。このため、今後リハビリテーション分野はさらに重要になると推察されます。

活動は、作業療法部門の同僚と共に患者様に作業療法を提供しながら実施しています。リハビリテーション科が患者様の生活の実情に合った治療の選択・実施を行うことができるという目標を立て、①作業療法の評価・治療の質の向上②作業療法チームの形成支援③チーム医療の基盤作り④所属先で病院スタッフや患者様・ご家族に対して作業療法の普及及び医療知識の向上に対して主にアプローチしています。活動では文化や価値観の違いに影響を受けることが多いです。活動終了後に任地で継続される支援を目指し、日々ベトナムに合った方法とは如何なるものか模索中です。

ベトナムでの生活は「日本とベトナムはとてもいい関係」「日本人を尊敬している」「日本製が一番だ」などの言葉をよく戴きます。また、日本語を話すことが出来る店員や日本語を学んでいる学生に出会う機会も多いです。日本に対しての親しみや信頼の念を抱いていただいている様に感じ取れ、とても友好的です。ベトナムの食事は日本ではヘルシーなことで有名ですが、実際に生活してみると、現地では砂糖や化学調味料の使用が多く、油分の多い料理も多いことに気が付きました。しかし、とても安く美味しいためついつい食べ過ぎてしまうことが悩みとなっています。これからも現地に住まなければわからないことを体験し、ベトナムへの理解を深めていきたいです。



【ベトナムの足の不自由な患者様が使用されていることの多い 三輪自転車。屋根付きでハンドル操作のみで操作することが可能です。】



【作業療法についての説明がベトナム語で記載されています。 研修生や見学者の多いい当院ではベトナムでの作業療法の普 及に力を入れています。】

4.編集後記

今回も活き活きとした現役隊員たちの活動を読み写真を見ると元気をもらいます。

例年通り、2019 年 4 月 20 (土)・21 (日) に JICA 市ヶ谷ビル・JICA 地球ひろばにて "協力隊まつり 2019" が開催されます。ご都合のつく方々は是非、ご来場下さい。なお、開催内容については、https://www.facebook.com/jocvfestival/ をご参照下さい。

【年会費納入への御礼】

年会費は 2018 年 12 月 6 日現在、112 名で、186,000 円が集まりました。本年度の目標としていた 20 万円に少し届いていませんが、たくさんの OBOG にご協力いただきありがとうございます。引き続きご協力ご支援をお願いします。

~お知らせ~

ホームページのご紹介

当会ホームページにて、定例会/協力隊ナビ/講演会/懇親会等、各種イベントのスケジュールや、活動報告を掲載しています。URL は下記ですが、「青年海外協力隊千葉 OB 会」で検索していただくことでもアクセスできますので、是非ともご覧ください。

青年海外協力隊 千葉 OB 会 ホームページ: http://www.jocvchiba.net/

メーリングリスト/facebook グループのご案内

上記ホームページにて、当会のメーリングリストと facebook グループへの参加をご案内しております。是非ご参加ください。

連絡先 お問い合わせや会報への寄稿は <u>info@jocvchiba.net</u> までお願いします。